

マンスリー

サンズ・トーク(51)

2013.2.1

木村 讀

日本は、徳川 300 年の鎖国が続いたため、産業革命も経験せぬまま明治維新に突入し、結果、近代国家として力強く自立することができた。それには、開国への情熱をたぎらせた幾多の先覚者の真剣な洋学研究があったことを忘れてはならない。

浅草の天文台

幕府の天文、暦術、測量を行う役所として、今の浅草橋 3 丁目に天文台が置かれていた。



天文方、高橋 ^{よしとき} 至時は、寛政 9 年 (1797)、寛政暦を作成した。この至時に師事した伊能忠敬が天文、測量術を使って全国を測量して回り、正確な日本地図を作ったのは有名な出来事だった。至時の子息、高橋景保は、西欧の学術を学ぶ必要があると進言して、文化 8 年(1811)、天文台に蕃書御用掛という外国語の翻訳局を設置して洋書の翻訳を行ったのである。景保は、文政 11 年(1828)、シーボルト事件の咎を受け、獄死してしまう。オランダ医師のシーボルトが、長崎から本国へ帰国しようとした折、伊能の日本地図の写を所持していたことが発覚、景保が国禁を犯して機密を漏洩したとされたのであった。

蕃書調所の独立

嘉永 6 年(1853)、ペリーが黒船により来航してのち、西欧列強が日本の開国を迫るようになり、国内でも開国か攘夷か、勤王か佐幕か、情勢風雲急を告げるに至った。幕府はこれに対応するため、安政 3 年 (1856)、浅草天文台にあった蕃書の御用掛を九

段坂下に移して蕃書調所とし、洋書、洋文の翻訳、研究、洋学教育を行い、欧米諸国との外交折衝も任務とするようになった。今、九段南交差点の交番の横に、蕃書調所跡の表示が残されている。



文久 2 年 (1862)になると、蕃書と言う名ははばかりあるとして、洋書調所と改名し、その翌年には、さらに幕府の開成所、開成学校と改編されて、そののち、一つ橋門外の護持院が原 (今の神田錦町) に移設されたのである。

幕府の開成所が東京大学に進化した



千代田区神田錦町の学士会館前の植え込みに東大発祥の地の碑がある。ここに、幕府の洋学研究の開成所が移ってきた。開成所は、洋書翻訳だけでなく、印刷、精錬、器械、物産、数学などの科学技術を伝習する諸科を次々開設し、西欧の文明に追いつく努力が日夜続けられたのである。

余談だが、学士会館には、新島襄生誕の地の碑もある。この地に安中藩上屋敷があり、彼は同藩藩士の子として生まれ、洋学を学び、アメリカに密航して大学教育を受け、キリスト教の洗礼を受けた。そして京都に同志社大学を創始したのだ。新島襄の細君が、会津若松の女丈夫、新島八重である。